

■ リスク回避ムード後退で円売り優勢の展開が続く…

前回更新分の本欄で、ドル/円について「そろそろ調整は一巡しておかしくない」、「114円台前半は押し目買い」と述べた。そして案の定、ドル/円は先週2日安値=114.14円から切り返す動きとなって、今週8日以降は115円台に乗せる動きとなっている。

市場は、米連邦準備理事会（FRB）による早期の（かつ想定超の幅での）利上げやバランスシート縮小の可能性などについてすでに十分に織り込みを進めている模様。もはや、市場が想定する以上にタカ派寄りの策など考えられず、むしろ市場の想定よりはハト派的な意見が当局者らから発せられるケースも増えてきている。

昨日も、クリーブランド連銀のメスター総裁が「0.5%の幅での利上げサイクルを開始する必要はない」との見解を示したり、アトランタ連銀のボスティック総裁が「今年は0.25%ずつ3回の利上げが適切」と語ったりしており、少なくとも「3月に0.5%引き上げで年内に7回」を超える話は出てこない（出てくるはずがない）。

結果、1月にあれだけ大荒れした米・日の株式相場もいまでは着実に安定を取り戻しつつあり、市場におけるリスクオフのムードは見る見る後退している。よって当然、リスクオフの円買い圧力も弱まっており、総じてクロス円は強含みでの推移となっている。

既知のとおり、目下の市場は本日（10日）予定されている1月の米消費者物価指数（CPI）の発表を控えて様子見姿勢を強めている。かなり高水準の結果となりそうだが、事前の市場予想もかなり高い水準にまで引き上がっており、結局は事前予想を大きく上回る驚愕の数字となるかどうか焦点ということになる。

もちろん、事前予想の水準が高いだけに、それを下回る結果が出ればちょっとしたサプライズで、一時的にもドル売りが優勢となる可能性もあろう。とかく世の中が足元の物価動向に対して過度なまでに神経質になっていることを考えると、ここは安易に投資判断を下すことも躊躇われる。

基本ドル/円に対しては強気でいたいのが、目先は適度な押し目があれば買い乗せするといった程度の感覚で臨むのが良さそうである。なお、押し目形成時の下値の目安は、やはり一つに一目均衡表の日足「雲」上限ということになるだろう。

一方、ユーロ/ドルについては、何とんでも先週3日に行われたECB理事会後の会見におけるラガルド総裁の発言が、市場にとってのビッグ・サプライズとなった。これまで比較的ハト派寄りだった総裁が、まさに「タカ派に豹変」というわけであるが、あれから早や1週間が経過するなかで、だいぶ“消化”された感もある。

豹変、変節と言っても、目の前で高進するインフレを軽視しない姿勢を表するのは総裁として当然のことであるし、そもそも目の前のインフレはコロナ禍によって非常に不自然かつ稀な形で生じたものであるから、その動向が極めて把握・予想しにくいことも事実である。

そもそも、ECB総裁が突然に変節したところで、ECBよりもFRBの方がずっと金融政策の正常化に前のめりになっているという事実は変わらず、少し長い目で見れば対ユーロでドルは強みを持ち続けるということになるだろう。

つまり、ユーロ/ドルに対しては例によって戻り売りのタイミングをうかがう姿勢で臨みたい。個人的には、先週4日に1月14日高値と顔合わせし、一目均衡表の日足「雲」上限に到達したところで、すでに一旦戻り売りを仕掛けており、目下は1.1390ドル処にある89日移動平均線を下抜けるかどうか注目している。仮に下抜ければ、追加でショート

(02月10日 10:00)